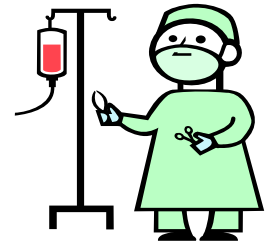


自己血輸血について

自己血輸血は、手術時の輸血に際して、もっとも安全な方法の一つとして当院でも行われています。今回は、この自己血輸血についてご説明いたします。



輸血に使われる血液

まず、一般的に輸血に多く使われる献血された血液についてご説明いたします。

善意の献血者より献血された血液は、日本赤十字社から病院に供給されるまでに、厳重に管理された工程で製造され、肝炎ウイルスや梅毒・HIV（エイズウイルス）等の感染症検査も非常に精度の高い方法で行われており、国際的にみても非常に高い安全性が確保されています。



血液を輸血するときは、病院ではABO血液型を合わせたうえで、交差適合試験（患者さんに対して、安全に輸血できる血液かどうかをチェックする検査です）を厳重に行い、輸血を行います。

しかし、ここまでしてもなお、副作用のリスクをゼロにする事は不可能です。

また、ABO血液型やRhのプラス・マイナス以外にも数多くの血液型が存在していますが、これらを全て検査しているわけでないので、自分と違う型が輸血され、「不規則性抗体」というものができてしまうことがあり、輸血の副作用の原因になります。さらに、これ以外の原因によるじん麻疹・発熱等のアレルギー反応が起こることもあります。

これらの問題を回避できる方法の一つとして、非常に有効なのが自己血輸血なのです。

当院で行われる自己血輸血

当院で行われている、自己血輸血は「術前貯血式自己血輸血」というものです。

これは、ある程度の出血が予測されている手術で、かつ貯血（血液を採取して貯めておく事）に必要な時間的余裕がある場合に行われる方法です。

また、稀な血液型の方や、以前輸血を行われたことのある方で、輸血による副作用を経験されたことのある方にとっても、非常に有効な方法です。



しかし、全ての患者さんに行えるわけではなく、病気や体の状態によっては、行うことができない場合もありますし、貯血する時間的余裕のない方にも行えません。この場合は、日本赤十字社より供給される血液を輸血することとなります。

なお、自己血輸血が適応となるかの判断は、医師によるものとなります。

